

関西大学博物館・関西大学東西学術研究所共催

山本竟山展開催の報告とその意義

関西大学博物館長 米 田 文 孝

関西大学博物館では、2018年（平成30）4月1日から5月20日の約2ヶ月間、近代日中文化交流の代表者である山本竟山（1863-1934）の展覧会を開催した。山本竟山は、1913年（大正2）に京都で開催された「蘭亭会」に発起人として参加し、東アジアの学芸的伝統を担った書家である。また、竟山と親交のあった歴史家の内藤湖南（1866-1934）、書画家の長尾雨山（1882-1942）および文人画家の富岡鉄斎（1837-1924）の足跡を同時に紹介した。

振り返ると、2013年（平成25）には、関西大学の博物館および図書館で、「大正癸丑蘭亭会百周年（おおさか）記念——近代日本における翰墨の盛典——」を開催し、書や絵画や文房具、書簡などを展覧して、内外の高い評価を得たことは、多くの関係者の記憶に新しい。今回の展覧会では、それを引き継ぐやり方で、「山本竟山の書と学問——湖南・雨山・鉄斎との文人交流ネットワーク——」と題して、本学図書館が所蔵する内藤湖南文庫に含まれる竟山関係の資料、山本家の遺存資料および京都国立博物館・鉄斎美術館の関連資料を調査研究し、それらの名品を一堂に展覧した。また、本学のルーツである泊園書院との関係で、1913年（大正2）の蘭亭会に発起人の一人として参加した藤澤南岳の事績をも顕彰した。

この展覧会は、東アジアにおける書学のキーパーソンとでもいうべき山本竟山についての全国で初めての企画展覧会であった。日中韓における書学の伝統と発展を振り返ってみれば、竟山の活動が、いかに重要であるかは明白であろう。今回の展覧会開催と同時に、山本家から竟山の書、絵画、手紙、文房具などの数多くの寄贈がなされ、それらのコレクションは、関西大学博物館に所蔵された。さらに、2018年（平成30）5月20日（日）に開催された関西大学教育懇談会に来られた多くの父母や学生たちにも展覧の内容を披露することで、大きな反響を呼んだことも忘れてはならない。今回の企画については、毎日新聞社が新聞記事で取り上げ、関西大学のアジア学を全国にアピールする絶好の機会となった。



関西大学博物館

日中の文化交流に大きな業績を上げた山本竟山は、岐阜市の紙商山本卯兵衛の長男として生まれ、斬新で爽やかな書風によって頭角を現し、東洋学者の内藤湖南らの強い支持を得て72歳で逝去するまで、明治・大正・昭和にわたって稀に見る活躍をした。また、漢学者で書画家でもあった長尾雨山、画家で儒者でもあった富岡鉄斎らと交流し、日本近代の文人世界を構築した。その偉業は、書、絵画、学問に及び、門人として書家の大橋泰山翁などを輩出している。しかし、書家として重要な足跡を残したにも拘わらず、竟山の研究と紹介はこれまでほとんどなされてこなかった。同時に、この企画では本学の研究の一つの柱である湖南を含めた内容となっており、本学のブランドを高く掲げる研究へと繋がるものであることは間違いない。

この企画は、泊園書院をルーツの一つにもつ関西大学から、東アジアの学芸的伝統および文化共有の内実を世界に向けて発信することを目的とした。明治維新以後の日本社会の展開は、脱亜入欧を旗印にして、西洋化を急速に進めた。そうした状況下で、中国を中心とした東アジアの書作品は、徐々に忘れられ、とりわけ、第二次世界大戦後には、西洋文化優位の価値観を基調とする社会にあっては、ほとんど埋もれてしまったといつてよい。しかし、近年、アジア文化再評価の気運が芽生えつつあり、竟山の実績も陽の目を見る情勢が増大してきたといえるだろう。

この企画は、関西大学博物館が世界に向けて、いわば「関西大学の知的財産」を紹介することによって、その膨大な研究蓄積と実力を誇示するものであり、日中文化交流の基軸となる独創的なアジア研究の展覧会という内容からいって、関西大学博物館のプレゼンスを内外にアピールできる意義深い企画であったと考えられる。

本取組は、2017年度関西大学教育研究緊急支援経費において、課題「山本竟山の書と学問——湖南・雨山・鉄斎との文人交流ネットワーク」として支援経費を受け、その成果を公表するものである。



展示会風景



展示会風景